

「夜が明けても」

本山航大

登場人物

片桐 綾(25)^{だん}

デバッガー

小野 遥(24)

ウェブライター

高崎 真衣(22)

綾の元恋人

音成 一(26)

遥の元恋人

店員

救急隊員

医師

○音成のアパート・リビング（夜）

横並びに座り、映画を見ている小野遥（24）と音成一（26）。

映画に夢中の遥に対し、音成はどこかソワソワしている。

それとなく遥の肩に手を回す音成。

来た…と身構える遥。

○真衣のマンション・リビング（夜）

ソファーに腰掛け、片桐綾（25）と高崎真衣（22）がテレビゲームをしている。

コントローラーを操作するのにかこつけ、綾に肩をぶついたり、ボディータッチをしたりする真衣。

ゲーム画面。真衣のキャラが勝つ。

真衣「いえーい」

綾「ああ、もっかい」

とリトライしようとするが、真衣がテレビを消す。

ん？と綾。

真衣、綾に向かい、そっと目を閉じる。
来た……と身構える綾。

○音成のアパート・リビング（夜）

音成、遙に顔を近づけていき……

遙、すんでのところで顔を背ける。

音成「……まだ、だった？」

遙「ごめん……うち、あんまり、したいって

思わないっていうか」

音成、察して。

音成「ああ。俺、初めてとか気にしないから」

遙、一瞬顔を強張らせつつ、愛想笑いを浮かべる。

遙「ありがとう」

○真衣のマンション・リビング（夜）

綾、真衣のキス顔をスマホで撮る。

真衣「あゝ」

笑って誤魔化す綾。

不満げな真衣。

真衣「……綾くんって、真衣に何もしないで
すよね」

綾「まあ、何もしないならって約束で家に来
てるしね」

真衣「じゃあ、熱湯風呂の前で押すなって言
われたらどうします？」

綾「押すね」

真衣「じゃあ、女の子と二人きりで、何もす
るなって言われたら？」

言葉に詰まる綾。

○音成のアパート・リビング（夜）

音成、気を取り直して遙に迫る。

音成を押しつける遙。

遙「ちよ、何もしないんじゃないんかい」

音成「いや、玉手箱渡されて、開けるなって
言われたらどうするよ」

遙「開けるね」

以下、それぞれの部屋で、それぞれの

相手に。

音成「俺たち、付き合ってたんだよね？」

綾「付き合ってるよ？」

真衣「真衣のこと、好きなんですよね？」

遥「うん、好き」

音成「え、全然意味分かんないんだけど。好

きだったらセックスしたいし、セックスし

たいから好きなんじゃねえの？」

綾、逡巡するも、意を決し、

綾「……あのさ」

遥「……うち」

綾「アセクシユアル、なんだ」

○音成のアパート・リビング（夜）

遥と音成。

音成は聞き馴染みがない様子。

音成「アセクシユアル？」

遥「そう。無性愛者って言った方が分かるか

な」

音成、腑に落ちない。

音成「無性愛者って……俺のことは好き、で合ってるんだっけ？」

遥「うん。もつと言うと、うちの場合は恋愛欲はあっても性欲はないってタイプ」

○真衣のマンション・リビング（夜）

真衣、察して。

真衣「綾くん、もしかして童貞？」

綾、うなずく。

真衣「カワイイ。それ、したことないから分かんないんですよ」

綾「違う」

○音成のアパート・リビング（夜）

遥と音成。

音成「やったこともないのに分かんなくね？」

俺で試せばいいじゃん」

遥、語気を強める。

遥「じゃあ、音成くんはさ、男とやりたいて思ったことあんの？」

音成「ねえけど」

遥「は？」

音成、気圧されていて。

音成「ないです」

遥「実際やってみないと自分がゲイかどうか
分かんなくない？」

音成「いや、俺が言いたいのはそういうこと
じゃなくて……」

遥「そういうことっしょ。しなくたって、自
分がその気になんないことぐらい分かるし」

音成、心配になってきて。

音成「……もしかして、昔なんかあった？

それかホルモンのバランスが崩れやすいと
か」

ああ、もう何を言ってもダメだな、と
遥、悟り始めていて。

遥「ごめん。とにかく、音成くんが求めるこ
とには応えられません。現場からは以上で
す」

音成、言葉を探す。

沈黙を破るように、帰り支度をする遙。

遙「ンじゃ」

遙、出ていく。

○真衣のマンション・リビング（夜）

真衣、綾の手を掴み、そっと自分の胸に当てる。

真衣「なんにも、感じないですか？」

答えられない綾。

真衣、不意に泣き出す。

真衣「分かんないですけど……綾くん、ほんとはゲイなんじゃないですかね」

啞然とする綾。

真衣「ごめんなさい。真衣、別に、そういうのに偏見とかなくて。ただ単純に、綾くんに女として見られてなかったんだなって」

綾「違う。真衣に魅力がないとかじゃなくて

—」

すすり泣いている真衣。

ああ、何を言っても届かないな、と綾、
悟り始めていて。

綾「ごめん」

綾、出ていく。

○線路沿いの道（深夜）

鈴虫が鳴く晩夏の夜。

千鳥足の遙が歩いている。

遙、ふらついて通りすがりの男にぶつ
かる。

遙「さーせん」

その男は、綾。

綾「大丈夫ですか？」

遙、泣いていて。

綾、何か声をかけようとするが、遙が
涙を隠すように去っていく。

綾「僕も今、泣きたい気分です」

遙、立ち止まる。

綾「ついさつき、恋人とダメになっちゃって。
僕たちが分かり合えたのは、僕たちは分か

り合えないってことだけでした」

遥「……うちも」

綾「え？」

遥「何もしないって言ったから家に行ったのに、やっぱりなんかしてきて。男って、やること以外にやることないんですか？」

綾「それは心外です。こっちは、何もしなかったせいで泣かれました」

遥「そうスカ。女を代表してすみません」

綾「こちらこそ、男を代表してすみません」

遥と綾、言葉が続かず戸惑っていて。

遥「ンじゃ」

綾「じゃあ」

お互い、反対方向へ歩き出す。

綾、歩いていると、後ろからええぞいっている声がある。

振り返ると遥がうずくまっついて、慌

てて駆け寄る綾。

吐き続ける遥。

綾、遥の背中をさすってやる。

綾 「大丈夫ですか？」

遥 「見て分かんない？」

綾 「すみません……もしかして、駅向かって
ました？」

遥 「イエス」

綾 「もう、終電過ぎてますね」

遥 「ノー……」

綾 「家、遠いんですか？」

遥 「地獄の3丁目です」

綾、反応に困る。

綾 「あの……よかったら、うちきます？ 近
くなんで」

遥、不審の目を向ける。

綾 「何もしませんから」

遥 「その言葉、テスト前の全然勉強してな
いより信用できません」

綾 「大丈夫です。僕はほんとにテスト期間中
もゲームしてました」

遥 「それはそれでヤバイやつ」

綾 「それに、ついさつき何もしなかったせい

で女の子を泣かせた男ですよ？ 信頼と実績があります」

遥「信頼は失ってますけどね」

落ち込む綾。

遥、再び嘔吐。しんどそう。

心配そうな綾。

○綾のアパート・リビング（深夜）

綾が遥を連れて帰ってくる。

片腕を綾の肩に回し、寄りかかるようにしている遥。血色が悪い。

遥「お邪魔します」

綾「はい」

綾、電気を点ける。

部屋にはゲーミングデスクとチェア、デュアルディスプレイのデスクトップPCにヘッドフォン、ゲーム機や山積みになったゲームソフトがある。

遥「さすが、テスト期間中もゲームしてただけありますな」

綾「おかげでゲーム会社に就職できました」

遥「へえ。ゲーム作ってんスか」

綾「デバッガーですけどね」

遥「デバッガー？」

綾「はい。バグを見つける人」

遥「ふ〜ん。恰好いい」

綾「そうですか？」

遥「はい。だって、おかしいことをおかしい
つていう仕事でしょ？ なかなかできるこ
とじゃないです」

頬がほころんでしまう綾。

綾「そんなこと、初めて言われました」

部屋の片隅に簡易な仏壇がある。

四十代くらいの男性と女性の写真が飾
られていて。

仏壇を見ている遥。

綾、その視線に気づき、

綾「ああ、両親です。高校のとき、事故で」

遥「……大変でしたね」

綾「まあ」

遥、気まづくなり、ゲーミングチェアに座って気丈に振る舞う。

遥「この椅子、いい感じっスね」

綾、心配げに遥を見ている。

綾「横にならなくて大丈夫ですか？」

遥「おっつと、いきなりベッドに誘いだす作戦です」

綾「違います。心配だから寝てほしいだけです」

遥「絶対怒らないから正直に言いなさいくらい信じられませんか」

綾「大丈夫です。いつの間にか友人の連帯保証人にされてたときも怒りませんでした」

遥「それは怒った方がよかったですね」

綾「ですね」

頭痛に顔を歪める遥。

遥「ーッ」

綾「大丈夫ですか？ほんとに横になった方が」

遥「ちよつと、シャワー借りてもいいですか？」

綾「……はい」

○同・洗面所（深夜）

すりガラス越しに、浴室でシャワーを浴びている遥が見える。

着替えを持った綾が来て。

綾「着替え、よかったら使ってください」

遥「え！？」

綾、着替えを置くと出ていく。

○同・浴室（深夜）

遥、すりガラス越しに綾が出ていくのを確認する。

唾然としていて。

○同・洗面所（深夜）

ぶかぶかの“彼氏Tシャツ”を着た遥。鏡を見ながら不安そうに佇んでいる。

○同・リビング（深夜）

もじもじと遙が出てくる。

床に布団を敷いている綾。遙を見るが、
何の反応もない。

綾「おかえりなさい」

肩透かしを食ったような遙。

綾「僕は床に寝るんで、どうぞ」

とベッドを差し出す。

遙「いろいろすみません」

綾「いえ。じゃあ、僕もシャワー浴びてくる
んで。おやすみなさい」

遙「……おやすみ、なさい」

綾、着替えを持って洗面所に行く。

恐る恐る、ベッドで横になる遙。

× × ×

電気の消えた部屋。

外は雨が降っていて、カーテンの隙間
から雨粒が窓を伝っていくのが見える。
遙がベッドで寝ている。

洗面所から出てくる綾。音を立てない
ように移動し、床に敷いた布団に入る。

綏に背を向けるようにして横になって
いる遙。

降りしきる雨の音。

その中に、遙のすすり泣きが入り混じ
る。

遙の背中を見て、取り乱す綏。

綏「あの、やっぱ何かするべきでした？」

遙「……ううん。違くて」

すすり泣いている遙。

遙「ちゃんと、好きだったのになって」

綏「……ああ」

遙「うち、どうしても体だけはダメで。今ま
で何回も失敗してきたのに、またおんなじ
ことしちゃいました」

言葉を探す綏。

綏「なんと言うか、あなたは間違っ
てないと思います。体を差し出さ
なきゃ成り立たない関係なんて、
おかしい」

遙、感心していて。

綏「僕なんて、人を好きになっ
たことなんか

ないのに、周りからは恋人がいるって思われたくて、付き合うフリとかして……」

遥「最低っスね」

自嘲する綾。

綾「恋愛感情なんて脳のバグだって思ったんですけど、人としてバグがあるのは、僕の方なんだと思います」

遥、綾に向き直る。何か言ってやりた
いが、言葉が見つからない。

力なく笑ってみせる綾。

綾「好きって、なんなんでしょうね。付き合い
うって、どういふことなんでしょうね」

遥「それが分かったら、ノーベル平和賞や」

綾「そうですね」

○同（早朝）

カーテンの隙間から、朝日が差し込ん
でいる。

ベッドで眠っている遥。

綾の叫び声。

飛び起きる遙。

遙「何？」

スマホを手に愕然としている綾。

綾「また天井です」

遙、天井を見る。

綾「そっちじゃなくて」

綾、スマホ画面を見せる。

画面にはスマホゲームのガチャ画面。

綾「また上限までガチャ回しちゃいました。

もう家賃払えないかもです」

呆れる遙。

遙「なんだそんなことか」

遙、スマホで時計を見ると朝の5時過ぎ。まだ眠そうにしている。

遙「今時、副業で稼げるじゃないですか」

綾「例えば？」

遙「ウェブライターとか。うち、会社員のと
きから記事書き始めて、今やフリーのライ
ターですぞ」

綾「すごい。記事ってどうやって書くんです

か？」

遥「教えません。うちになんのメリットもない」

綾「僕になんのメリットもないのに泊めてあげたじゃないですか」

遥「じゃ、また今度」

綾「ほんとですか？ 行けたら行くくらい実現性なさそうです」

遥「大丈夫です……はい」

綾「それ、来ても来ないやつですよ」

遥「さあ」

お互い、笑い合う。

○同・玄関（朝）

自分の服に着替えた遥を、綾が見送っている。

綾「お気をつけて」

遥、ドアノブに手をかけ、出ていこうとするも、綾に何か言いたげな様子。
ん？と綾。

遥 「バグじゃないっス」

遥、そそくさと出ていく。

ドアが閉まる。

フツと笑みがこぼれる綾。

○コワーキングスペース

机に資料を広げ、黙々とノートPCで原稿を書いている遥。

机のスマホにメッセージの通知が出る。

スマホを手取る遥。

画面のメッセージ。へ片桐綾 練習用

の記事書きました。今度見てくださ

い！〜

○ゲーム会社・オフィス

スタッフたちがデスクでPCに向かって黙々とゲームをしている。

その中に綾もいて。

スマホのバイブ音。

綾、スマホを取り出す。

スマホ画面。〈小野遥 よかろう〉

笑みがこぼれる綾。

○駅・改札（夜）

行き交う人の恰好に半袖と長袖が入り混じる、夏から秋への移り変わり。

長袖・長ズボンの綾、スマホゲームをしている。

改札から薄着の遥が急ぎ足で出てくる。

遥「すみませ〜ん、通りかかりに妊婦がいて遅れました」

綾「全米が泣いたくらい嘘っぽいです。でも、行けたら行くはほんとだったんですね」

遥「はい。信頼度アップですか？」

綾「ゲームキャラじゃないんですから」

二人、笑い合う。

遥「行きまっか」

綾「はい」

歩いていく綾と遥。

○ファミレス（夜）

向かい合って座っている綾と遥。

遥、タブレットを見ながら画面をスク

ロールしていく。

画面には好きなゲームをランキング形

式で紹介した記事。

無表情で読んでいる遥。

綾「どうですか、僕の記事」

遥「初めてにしては上手です」

綾「ほんとですか？」

安堵する綾。

遥「でも最後がダメ」

綾「え？」

遥「記事の締めで、いかがでしたか？って書

いてるでしょ？ それ、内容のうっすい

記事で死ぬほど書かれてきた常套句なんで、

陳腐に見えます」

綾「なるほど」

遥「まあ、女の子に、気持ちよかった？って

聞くのはNGみたいなね」

綏「……え？」

遥「あ、いや……ものの例えっス」

綏と遥、気まずい。

店員が料理を運んでくる。

店員「お待たせしました」

伏し目がちな綏と遥。

○同・外（夜）

傘をさす人もいればささない人もいる、

曖昧な雨が降っている。

店から出てくる綏と遥。

綏、折り畳み傘を取り出す。

綏「まだ早いですね。このあと、どうしま

す？」

綏、傘をさし、遥と相合傘。

遥、傘が狭く、綏に身を寄せるように

する。

遥「どうしましよっか」

綏「2軒目？」

遥「でもうち、お酒飲めませんよ？」

綏「じゃあカラオケとか」

遥「え、黒板引つ掻いたみたいな歌声ですけどいいですか？」

綏「それは……じゃあ、うちでゲームとか？」

逡巡する遥。

遥「ほほう。そうやって女の子を家に誘うんだ」

綏「いや……」

綏、言うか悩みつつ、

綏「あの、小野さんだから言いますけど」

遥「はい？」

綏「僕、アセクシユアルなんです」

遥、驚くでもなく、あっさりしていて。

遥「やっぱり」

綏「え？」

遥「そうかなって思っていました。うちも、そうなんです」

綏の方が驚いてしまう。

綏「え？ そうなんですか？」

遥「まあ、うちは人を好きになることはあつ

ても体の関係は求めないって感じなんで。

曖昧なんですよね」

綾「そうなんです。自分とおんなじような人と会ったの、初めてです」

遥「うちもっス」

綾、あらためて、

綾「それじゃ、うち行きますか」

遥「あい」

遥、相合傘から出る。

遥「やっぱ傘よくないですか？ 好きなんです。こういう、曖昧な雨」

歩き出す遥。

綾、その後ろ姿が微笑ましい。傘をたたむ。

綾「うちはこっちです」

遥と違う方向へ歩き出す。

遥「え？」

綾のあとを追う遥。

○綾のアパート・玄関（夜）

ずぶ濡れの綾と遥が駆け込んでくる。

綾「明瞭な雨になりましたね」

遥「だがしかし、傘はさしたくなかった」

綾「タオル持ってきます」

綾、部屋の中へ入っていく。

遥、下着が透けているのに気づき、腕

で胸を隠しながらあたふたしてしまふ。

綾、戻ってきて、タオルを差し出す。

綾「はい。シャワーどうぞ」

綾、遥の透けた下着には無関心。

そうか、と落ち着きを取り戻す遥。

遥「どうも」

遥、タオルを受け取り、洗面所へ。

○同・洗面所（夜）

すりガラス越しに、浴室でシャワーを

浴びている遥。

綾が入ってくる。着替えを置いてやり、

神妙な面持ちになる。

綾「バグじゃないって言ってくれたの、うれ

しかったです」

綾、洗面所から出ていく。

シャワーを浴びている遙。すりガラス越しには、聞こえたのか分からない。

○同・浴室（夜）

シャワーを止める遙。

照れて、カーツとなっている。

○同・リビング（夜）

洗面所からぶかぶかの服を着た遙が出てくる。

テレビゲームを用意している綾。

遙「シャワーどうぞ」

綾「ああ、はい。とりあえず髪だけ乾かそうかな」

綾、遙と入れ替わるように洗面所へ入る。

ドアを閉めてやる遙。

洗面所からドライヤーの音がする。

遥、ドア越しに、

遥「うちも、あなたは間違っていないって言うてくれたの、うれしかったです」

ドライヤーの音が鳴り響いている。

○同・洗面所（夜）

ドライヤーをつけたまま髪を乾かすでもなく、立ち尽くしている綾と
穏やかな笑みが込み上げてくる。

○同・リビング（夜）

横並びに座り、ゲームをしている綾と
遥。お互い、コントローラーを連打する
など必死に操作している。

遥「片桐さんって、誰にでも親切なんです
か？」

綾「え？」

遥、それとなく、

遥「あの日、あそこで会ったのがうちじやなくて、家に泊めてました？」

綾、コントローラーを操作する手が一

瞬、止まる。

綾「は……いいえ」

遥「今、はいつて言おうとしましたよね」

綾「い……はい」

遥、手が止まる。

遥「……うち、やっぱアセクじゃないかもで

す。誰かのことをよく知っていくうちに惹

かれるのって、性的指向に関係なくあるこ

とですよね？」

考え込む綾。

綾「白か黒じゃなく、グラデーションがあり
ますから」

遥「……グラデーション」

綾「はい。グレーセクシュアルとか、デミセ
クシユアルってのもあるし。こういうのっ
て、自分がそうだと思えばそうなんですよ」

遥、複雑そうな顔をしていて。

遥「じゃあ、うちじゃなくて、うちらのこと
はどうですかね」

綾「僕たち？」

遥「夏でも秋でもない季節に出会って、曖昧な雨の日に待ち合わせして……うちたちのことは、何もかもハッキリしないのかなって」

うれしいうような、申し訳ないような綾。
綾「僕は、すべての事柄に名前なんかなくたっていいと思ってます。ハッキリしてるのは、僕にとって、小野さんは特別な存在だってことです」

遥、照れ笑い。

遥「ヴェルタースオリジナルやないか」

綾も笑ってしまう。

綾「人が真面目に言ってるのに」

遥、恥ずかしさで火照ってきて、

遥「なんか、熱あるかも」

綾「え？」

綾、遥の顔を覗き込む。

ゆっくりと、顔を遥に近づけていく。

ドギマギしつつ、そっと目を閉じる遥。

綾、でこを遥の額に合わせる。

綾「熱い」

遥「へ？」

綾「冷えピタ持ってきます。今日は泊まってください」

綾、キッチンへ。

取り乱している遥。

遥「……手ですればよくない？」

綾「え？」

遥、居ても立ってもいられず、荷物をまとめる。

遥「帰ります」

綾「え、ちよっと」

遥、綾に取り合わず、玄関へ。

○同・玄関（夜）

靴を履き、そそくさと出ていこうとする遥。

綾も玄関にやってきて。

綾「ねえ、どうしたんですか？」

遥、綾を直視できない。

遥「脳に……バグが発生しました」

綾「え？」

遥「ンじゃ」

遥、出ていく。

ドアが閉まり、取り残される綾。

綾「脳に、バグ……」

○線路沿いの道（夜）

走っている遥。

立ち止まり、息を整えつつ、スマホを取り出す。

へもう会わない方がよさそうです〜と

綾にメッセージを打ち込む。

逡巡するも、送信する。

○綾のアパート・リビング（夜）

ゲームのコントローラーが2つ。

複雑そうにそれらを見ている綾。

スマホの着信音が鳴り、手に取る。

遙からのメッセージに、
「話したいです」と返信。

○線路沿いの道（夜）

遙、何か返そうとするが、スマホをポケットにしまう。
暗い夜道を歩いていく。

○並木道

街路樹が紅葉している。

○コワーキングスペース（夜）

遙、ノートPCに向かい、記事を書いている。

綾が入ってきて。

利用者たちを見渡す綾。誰かを探している。

黙々とタイピングしている遙。

綾、利用者の中から遙を見つける。
恐る恐る、遙に近づいていく。

すぐ目の前に遙の背中。

綾「お、お……（小野さん）」

遙「お？」

遙、綾に気づき、驚く。

遙「おおッ」

綾「お久しぶり、です」

遙「なんでいるんスカ？」

綾「いや、ウェブライターって、コワーキン

グスペース？ にいるのかなって」

遙「いや、なんでうちがここにいるって分か

ったんスカ？」

綾、ポケットからいろんな店の会員カ

ードを取り出し、ババ抜きの手札のよ

うにして見せる。

遙、わずかに頬が緩む。

綾、緊張しつつも、真剣な眼差し。

綾「あの……」

遙「はい」

綾「好きになるように、頑張るんで」

遙「はい？」

綾、構わず続ける。

綾「だから、小野さんのこと、好きになるよ
うに頑張りますから」

遥、戸惑いつつ、うっとりしていて。

利用者の視線が綾と遥に集まっている。

遥、我に返り、

遥「出ましょう」

と手早く荷物をまとめ、出ていく。

あとに続く綾。

○同・外（夜）

遥と綾が出てくる。

遥「さっきの言葉……」

身構える綾。

遥「百人乗っても大丈夫くらい安心感があり
ました」

綾、反応に困りつつ、

綾「……よかったです」

遥「でも、どうしたらいいのか……」

綾「小野さんのうち、行ってみたいです」

遥 「早くないですか？」

綾 「そうですね。なんなら、小野さんのこと初対面でお持ち帰りしちゃいましたけど」

遥 「人聞きの悪い」

綾、いたって真剣で。

綾 「小野さんちで、小野さんの手料理が食べたいです」

遥 「図々しいな」

綾 「すみません。でも、なるべくフツツの人たちがするようなことがしたくて」

遥、思い直す。

遥 「分かりました。ま、カレーしか作れませんけどね」

綾 「うれしいです。楽しみにしてます」
立ち尽くす綾と遥。

綾 「……戻らないんですか？」

遥 「戻れるかッ」

綾 「すみません」

笑い合う二人。

○遥のアパート・リビング（夜）

ワンルームで物が少なく、グレーを基調とした落ち着いた色合いの部屋。

キッチンでカレーを煮詰めている遥。

チャイムが鳴り、ドアモニターを確認する。

モニター画面にスーツ姿の綾。

遥、吹き出してしまう。

○同・廊下（夜）

ドアの前で立っている綾。

ドアが開き、遥が迎える。

遥「なんでスーツ？」

綾「……なんとなく。仕事帰りにまっすぐ来たみたいな感じにしようかなって。会社で

スーツ着たことないですけど」

硬くなっている綾。

その感じがおかしい遥。

遥「どうぞ」

綾「お邪魔します」

遥、綾を招き入れる。

○同・リビング（夜）

遥と綾がくる。

遥「お腹空きました？」

綾「はい」

遥「ンじゃ、早速食べますか。テキトーに座
つててください」

綾「はい」

遥、キッチンでご飯にカレーをよそう。
腰掛け、なんとなく部屋を見渡してい
る綾。

遥がカレーを運んでくる。

遥「どうぞ」

綾「ありがとうございます。いただきます」
とカレーを頬張る。

綾の反応を窺う遥。

綾「おいしい」

遥「カレーで失敗する人いませんから」
と言いつつ、満更でもない様子。

綾、どんどんカレーをかき込んでいく。

口元にカレーがつく。

遥「ねえ、食べ方……」

遥、ティッシュで口元を拭いてやる。

顔と顔が急接近する二人。

見つめ合い、逸らす。

綾「……今、フツーだったらキスしてたんですかね」

遥「……さあ」

食事が止まる。

綾「あの……僕たちがキスしたらどうなるのか、確かめてみたい、です」

遥「え？」

どうしていいか分からず、目が泳いでしまう綾。

遥、そっと目を閉じる。

綾、覚悟を決めてぎゅっと目を瞑り、ゆっくりと遥に顔を近づけていく。

唇と唇が触れるか触れないかくらいのキス。

綾、反射的に、遙を突き飛ばしてしま
う。

遙「―ッ」

啞然としている遙。

綾も気が動転していて。

綾「ごめん」

遙「…：…帰って」

綾「いや、あの―」

遙「帰れ！」

遙、カレーの入った皿を投げつける。

綾、なす術なく、立ち去る。

玄関から綾が出ていく音。

取り残される遙。

○同・廊下（夜）

ドアを閉め、未練がましく逡巡してい
る綾。

肩を落とし、帰っていく。

○同・リビング（夜）

涙目の遥。

○街中（夜）

イルミネーションが輝き、広場にはクリスマスツリーがある。

○ゲーム会社・オフィス（夜）

帰り自宅を整える綾。

綾「お疲れ様でした」

と帰っていく。

○コワーキングスペース（夜）

遥、ノートPCを畳む。

フロアに飾られたクリスマスツリーが目に入る。

スマホを取り出す。

スマホ画面、綾とのトークルーム。最後の連絡は「片桐綾 駅着きました。カレー楽しみです」へ小野遥 うい

と、その日の深夜に綾からの不在着信。

遙、メッセージを打ち込もうとする手が迷っている。

○街中（夜）

イルミネーションを楽しむカップルの中を、綾が独り、歩いていく。

男女のカップルの他、男性どうし、女性どうしで腕を組んでいるカップルもいる。

歩いていく綾。

綾「ヘテロロマンティック、ホモロマンティック、ヘテロロマンティック、ヘテロロマンティック」

ふと立ち止まり、スマホを取り出す。

遙とのトークルーム。

綾、へ会いたいです〜と打ち込むも思い直し、スマホをしまう。
背中を丸め、歩いていく。

○桜並木

桜の花びらが、春のそよ風に散って
いく。

○コワーキングスペース

ドアに「新型コロナウイルス感染拡大
防止のため、当面休業させていただき
ます」の張り紙。
マスクをして、茫然と立ち尽くしてい
る遙。帰っていく。

○同・外

出てくる遙。

人通りは少なく、道ゆく人はみんなマ
スクをしている。

遙、スマホを取り出す。

綾とのトークルーム。最後に会った秋
の不在着信以降、変化はない。

文字を打ち込む遙。

「お久しぶりです。コロナが流行って
ますね。お元気ですか？」

遥、しばらく逡巡するも、思い切って送信する。

遥「ていッ！」

ドギマギしていると、返信が来る。

遥「お？」

遥、恐る恐る画面を見る。

綾からの返信。〈ねつが〉

遥「え？」

すかさず返信する遥。

〈大丈夫？〉

〈だいじょうぶです〉と返信が来る。

遥、頭ではなく体が先に動き出したように走り出す。

○道

懸命に走っていく遥。

○綾のアパート・廊下

遥が駆け込んできて、綾の部屋の前に来る。

恐る恐る、呼び鈴を鳴らす。

音沙汰がない。

呼び鈴を連打する遙。

中から足音が近づいてきて。

綾の声「大丈夫って言ったじゃないですか」

遙「絶対痩せますくらい怪しかったんで。い

いから開けて」

綾の声「絶対コロナなんで開けません……小

野さん、ついた方がいい嘘だってあるし、

嘘に気づかないフリをした方がいいときだ

ってあるんですよ？」

遙「あつそ。じゃあそもそも返信なんかすな」

○同・玄関

ドアの前で立ち尽くしている綾。

遙の声「もしもし、はい、救急です」

綾「え？」

○同・廊下

電話をかけている遙。

遥「—はい、よろしく願いします」

と電話を切る。

綾の声「ちよつと何してるんですか」

遥「そっちこそ、なんで病院行かないんですか」

○同・玄関

ドアの前に綾。

綾「知らない方がいいことって、あるじゃないですか」

○同・廊下

ドアの前で考え込む遥。

遥「そうですね。でも、自分が知らないだけで、知りたくない現実があるってことには変わりないじゃないですか。だったらうち
は、知ったうえでどうするのか選んでいき
たい」

○同・玄関

綾、言葉を噛み締め、寄りかかるようにドアに頭を預ける。

○同・廊下

遙もドアに頭を預ける。

遙「ちゃんと知ったうえで、片桐さんとー」

ドア一枚を隔て、互いの額を合わせたような形になる遙と綾。

× × ×

救急車のサイレン。

○同・外

救急車が停車する。

○同・廊下

ドアの前に遙。

救急隊員が駆けつけてくる。

遙「ここです」

救急隊員がドアの前に来ると、自然とドアが開く。

綾が出てくる。

遥と綾の視線が交錯する。

遥「……」

綾「……」

綾、救急隊員に向き直る。

綾「熱があつて、コロナかもしれませんが」

救急隊員「分かりました。まだ搬送先を探していて、救急車に乗ってお待ちください」

綾「はい」

救急隊員「（遥に）保健所から連絡があると
思うので、指示に従ってください」

遥「……はい」

歩いていく救急隊員。

あとに続く綾。

遥「……片桐さん」

綾、恋しそうに遥を一瞥するも、何も

応えず、歩いていく。

その背中を、見送る遥。

○病院・病室

思い悩んだように、ベッドに寝転んで
いる綾。

○遥のマンション・リビング

ノートPCを広げている遥。

文章作成ソフトを開いているが、文字
は打ち込まれておらず。

浮かない顔をして、仕事に手がつかない
様子。

○病院・外

一人、出てくる綾。

何かが目に入り、立ち止まる。

遥が立っている。

遥「退院おめでとうございます」

綾「……小野さん」

遥、凜としている。

遥「うち、片桐さんの緊急連絡先になってあ
げます」

綾「え？」

遥「だって片桐さん、身寄りないでしょ？」

綾「そうですけど……緊急連絡先って、続柄は？」

照れている遥。

綾「知人？」

遥「もう少し、親しいんじゃないですかね？」

綾「じゃあ、友人？ でも、友人かって言われるとそうでもないような」

口ごもり、その次の言葉を期待している遥。

綾「じゃあ、恋——」

医師が出てきて。

医師「片桐さん、退院おめでとうございます」

気まずい綾と遥。

綾「どうも。お世話になりました」

医師、遥が目に入り、

医師「彼女さんも、心配でしたね」

遥「かのッ——」

取り乱す遥。

吹き出す綾。

綾「ご心配をおかけしました。彼女さん」

遥「……うっさい」

綾と遥、照れ笑い。

○綾のアパート・リビング

テレビでニュースを見ている綾と遥。

新型コロナウイルス関連のニュースが

流れている。

綾「緊急事態宣言、出るみたいだね」

遥「ね。うちたちも、会いにくくなのかな」

綾、かしこまる。

綾「遥」

遥「ん？」

綾「……一緒に、住まない？」

遥「……は？」

遥、言葉を飲み込めないでいる。

綾「前にさ、僕たちは曖昧なままなのかって

聞いたじゃん」

遥「……多分」

綾「今はまだ早いかもしれないけど、将来は、

もっとハッキリした関係になるのもいいの
かなって、思ってた」

遥「それって、どういう？」

綾「いわゆる、夫婦ってやつ」

遥「夫婦？」

綾「うん。何もしない夫婦っての、どうかな」

遥「……」

遥、手でキツネを作る。

遥「綾もやって」

綾も手でキツネを作る。

遥、手のキツネで、綾のキツネにキス
をする。

微笑み合う綾と遥。

キスを交わす、二匹のキツネ。

○寺（夜）

打ち鳴らされる除夜の鐘。

○綾と遥のマンション（夜）

温かい蕎麦をすする綾と遥。

遠くから除夜の鐘が聞こえる。

○浜辺（明け方）

水平線を眺めている綾と遥。

綾「1年、あつという間だったね」

遥「今年はもうちょい良くなんのかな」

綾「さあ。でももう、独りじゃないし」

照れる遥。

家族連れが来る。3歳くらいの子ども

を連れていて。

その家族を見やる綾と遥。

綾の視線の先には、父親の幸せそうな

笑顔。

微笑ましく見ている綾。

遥が見ているのは、母親に抱かれ、眠

っている子ども。

浮かない顔の遥。

綾「あ、初日の出」

水平線から、朝日が顔を出す。

晴れやかな綾。

曇っている遥。

綾「やっと、長い夜が終わったような気がするよ」

遥「うちは、長い1日が始まったような気がする」

朝日が、刻々と昇っていく。

タイトル『夜が明けても』

おわり